



# 鶏 けいめい 鳴

2008年7月13日(第15号)

## イエスの言葉

『他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実にあずかっている』  
聖書(ヨハネ福音書4章38節)

牧師 河合裕志

ここで「他の人々が労苦し」とは第一にイエス自身のこと。イエスはあちらの町、こちらの村と熱心に伝道して歩いた。み言葉の種まきに当った。ミレーの「種まく人」のように。やがてまかれた種が芽を出し成長し実を結ぶ人々が出て来る。つまりイエスを「救い主(ぬし)」と認め信じる者が生れて来た。

この者達を「刈り入れる」、必要な手引きをして洗礼を授け永遠の命を得させる、これがイエスの弟子たちの働き。

これが「あなたがたはその労苦の実にあずかっている」ということ。

そして今度は弟子達がみ言葉の種まきに当る。

種をまいているうちに迫害を受け殺される者も出て来る。ローマ世界にあって、紀元313年キリスト教が公認されるまでの300年間、弟子達は非常に「労苦」した。地下墳墓にもぐってまで礼拝を続けた。こうした先輩のお陰で「実り」が与えられ教会は進展して来た。

来年2009年は横浜開港150年。

同時にプロテスタント伝道150年。キリシタン禁令の高札が撤去される14年も前、1859年、安政6年に米国より宣教師へボン等が太平洋を渡り、み言葉の種まきを開始。針灸師であった矢野元隆が洗礼を受けてプロテスタント第1号の

信者となり宣教師の聖書翻訳事業を助ける。

やがて横浜海岸教会や指路教会が誕生、フェリス女学院、横浜共立学園等多くのミッションスクールが立つ。

そこには多くの先人の「労苦」があった。その「結果」「実り」として今日のヨコハマ、そして私達がある。

そこで今度は私達が多少の「労苦」を引受ける番。明日の「実り」を信じつつ、み言葉の種まきに当るということ、教会として個人としてこれを心がけること。

現在はそれこそ先輩の労苦により信教の自由が保証され、おおっぴらに伝道すること、信じる事が許されている。感謝なこと。

イエスの述べる「他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実にあずかっている」は以上の意味に受取ったけれど、この「他の人々」を親とか先祖と拡大解釈も出来る。親等の労苦によって、その実りに、つまり財産とか教育とか信仰といった良いものを身につけている人々がいる。感謝なこと。

そして今度は私達自身が多少の労苦をいとわず、良いものを子供達に、あるいは広く社会に残すこと、そうであれば誠に幸いなこと。

### 集会案内

主日礼拝	: 毎日曜日	午前10時15分
こどもの教会	: 毎日曜日	午前9時
高校生会	: 毎日曜日	礼拝後
婦人会・壮年会	: 第2日曜日	礼拝後
聖書を学ぶ集い	: 第4水曜日	午前10時
オリーブの会(読書会)	: 第3月曜日	午前10時